
最優の鍛冶師

夢魔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最優の鍛冶師

【Nコード】

N95600

【作者名】

夢魔

【あらすじ】

剣の道に生きる女子高生『仙道茜』は嫌悪する幼馴染の異世界召喚に巻き込まれ剣と魔法の世界『レイアース』に到ってしまう。召喚された異世界人には元の世界の神が一柱だけ『守護神』として憑く決まりなのだが、茜を見初めたのは製鉄・鍛冶の神である『天目一箇神』。超前向き思考な茜は帰還の手段がないと分かるや否や剣士兼鍛冶師として異世界で生きていくことを決意する。※主人公を巻き込んだ張本人は勇者として立身出世し自分だけのハーレム形成を目指していますが、主人公は関知する気が更々ありませんので悪

し
か
ら
ず。
。

【Side..茜】

「それで、何で貴様は此処に居る？」

私にもう付き纏うなど申し渡した筈だが」

何時も通り稽古を終えてから剣道場を出ると、金髪碧眼の青年が校門に寄り掛かって私を待ち構えていた。

此奴の名前は『鬼道直也』。

認めたくはないが、我が『仙道家』と祖を同じとする『鬼道家』の嫡子で、由緒ある仕来りを守り続ける仙道とは違い、時代の流れを汲んで企業として成功を収めた俗に言う成り上がりの家系である。

直也は私とは所謂幼馴染の関係だが、今の美少女・美女ならば誰彼構わず口説く下種な趣味を全開にするようになってからはできるだけ口を利かないようにしている。

が、複数人の彼女がいる癖に私にしつこく言い寄ってくる。そのせいでこの馬鹿のファンが多いこの高校では女友達はできないし、女子を敵に回したくない男子共は静観するだけ。

「おいおい。この俺が態々手ずから声を掛けてやってるのに酷い言い草だな」

「誰も頼んでいない。」

私なんかに構っている暇があったら沢山いる恋人達の処に行ったらどうだ？」

「嫉妬か、茜？」

何時も言ってるだろ、本当に愛しているのはお前だけだって。何なら付き合っている奴らと今直ぐ別れたっていいんだぜ？」

「止めてくれ、私が刺される」

何で世の女共は、確かに文武両道だがこの口先だけの男に悉く絆されるのだろうか。

歩く二宮金次郎像なんかより余程七不思議に相応しいと思うが。

「偶には一緒に食事でも行こうぜ？」

「遠慮させてもらおう。」

この後、祖父との稽古の約束があるからな」

祖父の名前は『仙道誠一郎』。

両親が幼い頃に死去した私にとったは親代わりで、剣士として唯一尊敬できる傑物。

「……………」

「そういう訳だ、失礼すッ!？」

祖父のことが苦手な直也が何も言い出せないのを一瞥し、校門を潜り抜けようとした瞬間、肩から下げていた剣道の装具一式が入った袋を急に引っ張られる。

「直也ッ！何をッ！！」

「茜、助けてくれッ！！」

「！！？」

当然抗議の声を上げるが、直也の慌てふためく声に反応して後ろを振り向くと彼の半身が光の渦に嵌り今もずぶずぶと飲み込まれていく。

離すのは簡単だし、こんな女をとつかえひつかえするような屑を助ける義理もないが、腐っても幼馴染だ捨て置く訳にもいかない。

「ひいッ！？」

「もう……駄目だッ！！」

だが必死の抵抗も空しく、吸引する力を増した光の渦に飲み込まれ、私は意識を手放した。

「ハッ!? 此処は一体」

次に目を覚ましたのは、四方八方真っ白な空間。

《目を覚ましたようだな》

そこに現れたのは漆黒の勾玉。

どうやら頭に響く野太い声の主はこの勾玉から発せられているようだ。

《野太いとは失礼だな》

「思考が…読めるのですか？」

《それでも神の末席に身を置く者だからな。あと、無暗に覗く気はないから安心しろ》

「御身が神とは露知らず、失礼しました。

私の名は仙道茜と申します。以後、お見知りおきを」

《……………》

佇まいを直し正座で名乗りを上げると、急に黙ってしまう。

「どうか：されましたか？」

《いや、胆の据わった娘だと思ってな。

我が名は天目一箇神、製鉄・鍛冶の神だ》

確か日本神話に登場する神で、別名は『天之麻比止都禰命』、
あめのくしまひとつねのみこと天久斯麻比止都命』だったかな？

《詳しいな、その通りだ》

「無暗に思考を読まないのではなかったのですか？」

《ワハハハ：済まん済まん。

それでは本題に入るとするか》

「お願いします」

何ともフレンドリーな神様だな。

無駄に偉そうにされるよりは万倍ましだけど。

《率直に言おう。今回君は完全に鬼道直也に巻き込まれた形だ。

実はこの世界と隣り合う異世界レイアースで勇者召喚の儀式が行

われた。そして選ばれたのが………》

「直也という訳ですか」

《その通りだ。

全く能力の高さだけを基準に召喚術を行使するとは愚の骨頂だな》

確かに、性格を考慮せずに単純な能力面だけでいうなら直也は間違いなく勇者の資質はあるだろうが………私を巻き込まないで欲しい。

「こうして説明をされるということは……」

《うむ………召喚された者を元の世界に還すことはできん》

「そうですか……」

重々しく告げる天目一箇神の言葉を私はすんなりと受け止めることができた。それはなんとなく察していたからで、ショックを受けていないと言えば嘘になるが、神である彼？が不可能だとするならそれは真実なのだろう。

「では、これからの話をしませんか？」

《は？》

「だって、何時までも如何にもならないことをうだうだと悩んだって仕方がないでしょう？」

それより、もっと実りのある会話をした方がお互いの為ですし建設的だと思うんです」

《ク：クク……ワハハハハハハハハハハッ！！

確かにその通りだ。俺の事は天目一箇てんもくいつこと呼べ、これから幾久しく共に在る相棒だからな》

「え、え」と

《此方の世界からレイアースへと召喚された者には規則で一柱神が憑くことになっている。

それで魂の波長が合ったのが俺という訳だ。よろしく頼むぞ、茜》

「こ、こちらこそ」

如何やら随分と気に入られたようだ。あの馬鹿とは違い呼び捨てにされても全く不快に感じない。

友達には恵まれなかったが、いい相棒には恵まれたようで安心した。

《では、そろそろ行くか。

レイアースに付いては向こう側に着いてから詳しく説明してやるう》

「あっ、一つお願いが」

《分かれている、御祖父のことだろう？
連絡は必ずさせてやるから安心しろ》

「ありがとうございます、天目一箇」

《ああ。行くぞ、茜！》

「はい！」

こうして私は天目一箇と共にレイアースへと旅立った。
剣と魔法の世界へと。

#001

【Side..茜】

「あの盆暗息子が、家の茜を巻き込みおって！」

「お、御爺様落ち着いて」

あれから無事、天目一箇の言っていた剣と魔法の世界『レイアース』へと辿り着いた私は約束通り、御爺様に連絡を取らせて貰っている。

予測通り、事情を知った御爺様は大激怒。もし今直也が目の前に現れたら真剣でバツサリだろう。

《無理からぬことだろう。あの様な下種に茜の人生が歪まされたかと思うと俺も憤りを禁じ得ない》

「おお、天目一箇殿はお話が分かる御仁のようだ。
一度貴方とは酒を酌み交わしたいものです」

《気が合いますな、俺もです》

《「ワハハハハハッ!!!」》

「……………」

天目一箇のこと、誰かに似てるような気がしてたが………まるで御爺様が二人居るようだ。

「茜よ………」

「は、はい」

《此方の事は心配するな。

学校の方も上手く誤魔化しておく。間違ってもあの盆暗と駆け落ちしたなどという下らん噂を流させせんよ》

「くれぐれもお願いします」

それだけは断固として遠慮したい。

もう元の世界に帰ることは出来ないとしても、そのような噂が立ったら切腹ものだ。

《む。茜、翁、そろそろ時間だ》

「天目一箇殿。茜のこと、宜しくお願い致します」

《我が神名に懸けて》

「では御爺様、御元気で」

「勇往邁進の心忘れるでないぞ、茜」

「はい！」

《頻繁に連絡を取ることはできんが、できるだけの配慮はしよう》

「いえ、連絡させて頂けるだけでもありがたいです」

《そうか：ではこの世界『レイアース』について語ろうか》

「はい。その前に此処は何処なんでしょうか？」

あの真っ白な空間『狭間』から門を潜って着いた場所は現代日本では考えられない美しい自然に囲まれた湖畔。其処で直ぐさま元の世界へ連絡をした為聞きそびれたのだが……

《それも含めてな。

この『レイアース』は茜が存在した世界『ジアース』とは限りなく遠いが限りなく近い鏡面世界。

『ジアース』は科学技術で発展したが、逆に『レイアース』は魔法技術で発展し文化レベルも『ジアース』の中世時代に相当するだろう》

一に稽古、二に勉学の生活をしていた私は余り読んだことはないが、ライトノベルというのにファンタジーというカテゴリがあるらしいが、これは正にそれと言える。

これだけの体験をしておいて、未だに実感の湧かない私は頭が固いのだろうか。

《まあ、魔法も文化も慣れれば何ということはない。
では主な国と種族の解説に移るぞ》

「国は兎も角、種族ですか」

《『ジァース』に多種多様な人種があるのと同じだ。
人族、獣人族、竜人族、魔族が主だが、少数種族としてエルフや妖精もいる》

妖精………見てみたい。

《クク………》

「天目一箇…また読みましたね」

《ワハハ………って無表情で握りしめるな!? 割れる割れるッ!!
?》

首から下げていた漆黒の勾玉から非難の声が聞こえるが無視して力を強める。

自業自得だし、こういうことは最初が肝心だからな念入りにやっておこう。輝が入るかもしれないが……一応神だし大丈夫だろう。

《茜！悪かった、二度とせんから！！ひ、輝がギヤアアアアアアアアアアア……あ》

あ、割れた。

【Side..茜】

《ハア：ハア：憑代よりしろだったから良かったものの、二度目は勘弁してくれよ？》

「でしたら、最初から人の思考を読まないで下さい！」

《それはそうだが、逆か妖精に会いたいと思うとは予想していなかったのだな。》

矢張り女の子だな………クク》

「もう一度碎けてみますか？」

訂正、最高の相棒は相棒でも少々癖が強すぎる。
が、天目一箇がパートナーだと知った時は心底安心した。正直な所、異世界に召喚されると聞いた瞬間あの馬鹿と一緒に見知らぬ世界に放り出されるのかと寒気を感じた程だ。

《冗談だ、真面目な話をしよう。》

今居る大陸『アルヴァトロス大陸』に存在する主な国は『ランバース王国』『レグザール帝国』『ローゼンベルグ公国』『バレスティナ共和国』の4ヶ国だ。

これらは基本的に人族が治めている国だが、『バレスティナ共和国』だけは君主が居ない議会制で議員の中に獣人族もいるな》

「獣人族が治める国はないのですか？」

《こういう言い方は嫌いだが、大陸全土で見ると獣人族は冷遇されがちだからな》

人種差別ならぬ種族差別か……日本、私の周囲では別世界の話だったが、ここで暮らす上では避けては通れないのかもしれない。

そういう光景に出くわす事もあると覚悟しておいた方がいいようだ。

《今は関係ないから詳しくは話さんが、『アルヴァトロス大陸』の南方にある『ユルギス大陸』は竜人族が治めている。何故国名がなにかというと、複数の部族が存在し土地を転々としているからだな。因みにこの大陸には、聖域とされる『ユーフォリア大森林』があるが、此処にエルフや妖精がいるとされている》

ユーフォリア大森林…聖域とされているからには容易には入れないのは想像がつく。

確かに、他の大陸に感^かじている余裕のない私にとっては当分は関係のない話。

エルフや妖精には多大な興味があるが、今は地に足をつけてこの世界で生きていかなければならない時、己の興味など二の次だ。

人族、獣人族、竜人族……あれ？

「天目一箇、魔族は何処に？」

《……『アルヴァトロス大陸』だ。

実はこの大陸、『ギルフォール山脈』によって東西で二分されている。

東は人族たちの治める『ランバース王国』『レグザール帝国』『ローゼンベルグ公国』『バレスティナ共和国』の4ヶ国が、西は魔族が支配する通称『魔界』があるという訳だ》

「魔族は何か目立った動きを見せているのですか？
直也を勇者と呼ぶには些か抵抗はありますが、奴が喚ばれたのはその為でしょう？」

《三百年前に一度、大侵攻があつてからは『ギルフォート山脈』に隣接する『ランバース王国』『レグザール帝国』の国境で定期的に小競り合いがある程度だな》

「…………お飾り、ですか？」

《察しが良いいな、勇者召喚の儀式を行ったのは三百年前魔族の大侵攻を食い止めた英雄と同じ看板を欲してのことだろう、と俺も実践んでいる。

が、魔族共が水面下で動き出していることを何らかの方法で『ランバース王国』が察知して勇者を喚んだという可能性も高いがな、あの国には優秀な先見の巫女がいるらしいし》

英雄の看板か、あの直也ならいい張りぼてになるだろう。

英雄色を好むと言うし、世渡り上手の奴のことだもう既にその『ランバース王国』の姫君でも誑し込んでいることだろう。

「私が一番心配なのは魔王に世界の半分をやるから仲間になれと言われて直也が寝返らないかどうかです」

《違うない。

ま、国と種族に関してはこんなもんだろう。

何だかんだ言ったが、異世界の神である俺が知っている情報は所詮一般人程度なら誰でも知っているレベルのもんだからな》

「それでも矢張り、下地があるのとないのとは違いますから」

《後は俺の役割に関しての説明だな。

地味だが、この憑代たる勾玉は身に付けてさえいればこの世界の言葉を喋ることも書くこともできる万能な翻訳機能が備わっている》

いやいや！全然地味じゃないだろう！！

寧ろ、私の生命線とさえ言える代物ではないか。それを知らなかったとはいえ割ってしまうとは！この仙堂茜、一生の不覚！！

《割ってしまったことなら気にするな。

あれは俺に落ち度があったし、割れた程度ではどうにもならんよ。それに、万が一崖から落としたとしても自動的に手元に戻ってくるしな》

「べ、便利なものですね」

《仮にも神の憑代だからな、高性能過ぎても困ることもあるまいて。そんなじゃあ、説明を続けるぞ》

「はい」

#003

【Side…茜】

《『天目一箇神』である俺とリンクしていることで得られる恩恵は五つ。

一つ目は『身体能力の向上』、これは口で説明するよりは実際に体験してみた方が分かり易いだろう。茜、そこにある岩を本気で殴ってみろ》

「これを、ですか？」

天目一箇が指定したのは傍にあった何の変哲もない目測で高さ3メートル程の巨岩。

言われるがまま正座を解き巨岩の前に立つ。

私の身長が170cmだから約1.7倍といったところか。

「……………スゥ」

迷うな、疑うな、やってやれないことはない。

息を吸いながら自分にさながら暗示の如く言い聞かせる。

そして、四肢に、体全体に丹田から溢れ出させた気を巡らせ……………

「破ッ！！！」

掛け声と共に解き放つ！

振り抜かれた拳は巨岩に吸い込まれるように直撃し、対象を木っ端微塵に破壊せしめる。

ふう、成功だ。

《どうだ茜？》

「何時もより簡単に碎けました。

『身体能力の向上』、確かに凄まじいものですね」

《……ちょっと待て、何時もだと？》

「ええ。祖父に「武芸者たるもの己の肉体のみで戦えなければならい」と鍛えられたので、この程度の岩ならその『身体能力の向上』がない以前でも破壊できましたよ」

《……二つ目は『不老長寿』だ》

スルーされた！？

《これは、体のコンディションを常に最高の状態に保つ能力で、二

十歳前後で老化が止まり、毒などの体に異常をきたすものを自動的に排除する効果がある。

その副次的な作用として、寿命が最長で150年程延びるがエルフなんかと比べたら大したことはない》

コンディションを常に最高の状態に保つ、か。

なら、修練の為に我慢していた甘味を食べても大丈夫ということでは、いやいや立派な武人になる為には……………

《最後は俺の権能でもある『せいてつ製鉄・かじ鍛冶』だ》

はっ！危ない危ない、思考が変な深みにはまるところだった。

《簡単に言うと、『せいてつ製鉄』は鉱物ならば玉鋼からオリハルコンまで、任意の物を好きなだけ取り出せる能力。ただし、厳しい制約があり取り出した鉱物の使用目的は鍛冶に限られる事と、要求する量とランクに応じて用意に相応の時間が掛かる事を覚えておいてくれ。

変わって『かじ鍛冶』はシンプルに武具などを造る知識を与え、眠れる才を完全に引き出す能力だ。

あと四つ目と五つ目の権能『ことだま言霊』『あまのいわと天岩戸』にていての詳しいことはその時でいいだろう》

鍛冶か……………御爺様が刀剣類の収集をしていたから、私の興味も自然とそっちに向いていたけど、私の場合は刀そのものというよりそれができた背景や工程が気になって仕方がなかった。そういう意

味では鍛冶師という職業にも興味があるし、天目一箇と波長があったというのも納得できる。

ただ、最大の要因は八年前の私の未熟さが招いた出来事に起因しているとは半ば確信している自分がいた。

「それじゃあ、近場の街で鍛冶のできる工房兼自宅を探しましょうか？」

《それでいいだろう》

「ああ！」

そういえば今居る国の名前、まだ教えてもらってませんよ？」

《悪い悪い、忘れてた。》

此処は海に囲まれた島国『ローゼンベルグ公国』だ》

#004

【Side…茜】

「はあ、あれが『ティグリス』ですか」

《ああ、『ローゼンベルグ公国』の首都『ルグレス』の南方に位置する中規模都市『ティグリス』だ》

山中の獣道を抜けてある程度は舗装された街道沿いを進み到着したのは、まるでヨーロッパの中世時代に迷い込んだのかと錯覚させる町並みの都市『ティグリス』。

その周囲は水が流れる堀と15M程の城壁に囲まれ、南方には跳ね橋が架けられている。

「美しい都市ですね。少々物々しい気もしますが」

《魔物、所謂モンスターと呼ばれる存在が闊歩する世界だからな。

まあ、基本的に奴らは人里に近づくことは滅多にないが凶暴な大型モンスターも存在はするし、備え在れば憂い無しとも言おうだろう？》

モンスターねえ………ちよつ・と・待・て。

「聞いてませんよ、私はッ!？
そんなものが闊歩する森の中を何の説明も無しに歩かせたのです
かッ!?!？」

《ハハハ……結果オーライ？

もしもし茜さん？何故私の憑代たり勾玉を握り締め、振り被って
いらっしゃるのでしょうか？》

分からないのですか？聡明な天目一箇ならば察しがつくと思いま
したが。

ならば声を大にして言って差し上げましょう。

「反省！しなさいッ!!」

《ギャアアアアア……アア……ア……アア……アア……ア》

『身体能力の向上』の権能を与えてくれた本人に対して振るわれ
た力は一切の容赦なく勾玉を遥か遠くに広がる海へと運ぶ。着水す
る瞬間まで何やら野太い声で断末魔が聞こえた気もするが気のせい
だろう。

さて、先を急ぎましょうか。

え、天目一箇は如何するかって？
その内戻ってくるでしょう、一応神ですし。

《いやゝ、こっちの世界の海に潜ったのは始めたが中々綺麗なもんだったぞ。

その代わり、海に生息するモンスターがうようよいて危うく飲み込まれるだったが》

「（モンスターの危険性について再認識できて良かったのでは？）」

あれから深淵の海から五体満足？で帰還した天目一箇を再び首に掛け、『ティグリス』の門を潜る。

門兵には訝しげな眼で見られたが、社交的な意味で笑顔を返すと顔を赤くして視線を逸らしてしまった。

確かに、服装は高機動戦を得意とする私の為に御爺様が特注で用意して下さった剣道着と剣道袴だから訝しげな眼で見られるのは分からないでもないが、顔を赤くされる理由は皆目検討もつかない。

剣道着と剣道袴に使用してある布地は刃が通らぬ使用になっており、剣道着は肩部分から露出しているのが特徴的だ。

「（それにしてもこのなりで素通りできるとは、警備体制は緩いのですか？）」

《近年他国と大きな諍いなどは起きとらんし、何よりこっちは手ぶらだ。服飾が物珍しいというだけで拘束される謂れはないからな。だが茜よ。この世界では黒髪と黒い瞳を持つ存在は非常に稀だということだけは覚えておいた方がいい》

「(ええ)」

先程から四方八方から感じる視線も天目一箇の言を裏付けている。

因みに、直哉の場合は鬼道の当主である父親とハーフの母親の間に産まれたクォーターの為、金髪碧眼の容姿をしている。

今の様に歪んだ性格になったのは家庭の環境もあるのだろうか、私が居なかった女子小・中学校の間に何かあったのか………考えても詮無きことか、二度と会うこともあるまいし。

「(さて！先ずは質屋でお金を用立てないといけませんね)」

《質屋に入る前に金塊を出すか、少し準備しておく………》

この世界の通貨に関しても天目一箇から説明は受けている。面白いことに、この世界の通貨単位は元の世界のものと大変酷似しているというより全く一緒と言っても過言ではない。

白金貨・金貨・銀貨・白銅貨・黒銅貨・青銅貨・赤銅貨の六種類が存在し、赤銅貨十枚で青銅貨一枚、青銅貨十枚で黒銅貨一枚、黒銅貨十枚で白銅貨一枚、白銅貨十枚で銀貨一枚、銀貨十枚で金貨一

枚、金貨十枚で白金貨一枚といった相場となっている。

日本円に換算して、赤銅貨は一円、青銅貨は十円、黒銅貨は百円、白銅貨は千円、銀貨は一万円、金貨は十万円、白金貨は百万円で考えると分かり易いだろうか。

「（ここだな……『ローグレス通商会』か）」

《着いたようだな。金塊の準備が出来たから少し路地裏に頼む。

だが、金銭目的で『製鉄』を扱えるのはこれが最後だ。今回は巻き込まれた茜に対する救済措置として、支度金代わりに金塊を与えることになっただけだからな》

「（ええ、分かっています）」

路地裏に入り天目一箇から1?程の金塊を受け取り、それを何時も持ち歩いている風呂敷に包み『ローグレス通商会』の扉を開く。

「いらっしゃい」

入った瞬間聞こえて来たのは何とも間延びした入店を歓迎しているのか、そうでないのか分からない声。

その人物は左目にモノクルを掛けた若草色の癖毛が特徴的な青年で、細められた目と柔和そうな笑みは一見人懐っこい印象を与えるが、私的には如何しても胡散臭く感じる。

そして、商品棚を一通り見回すと、薬品や植物など様々な商品が陳列されている。

「ほんで、今日は如何いった御用件で？可愛らしいお嬢ちゃん」

「これを買取って貰いたいのだが」

金塊の入った風呂敷をカウンターに置き広げる。

「スルーかいな、どれどれ。……ほう！これは純金かいな！！よく調べてみると分かんけど、こんなに純度の高いもん始めて見るわ」

《拙いな、少し迂闊だったか》

「幾らだ？」

天目一箇も世間一般に流通している鉱物の純度に関してまで気を回せなかったのだろう、少々声が低く後悔していることが感じられる。

《多少は足元は見られかもしれんな。白金貨三枚は軽いと思っ
たが、半額程度になるやもしれん。

まあ、用意するのに費用が掛かった訳ではないから、当面の資金
を確保できるだけで御の字とすべきか》

「そやなく、白金貨……三枚といったところやろ」

「《は?》」

「何やねん、その間の抜けた声は。

ワイが相手の足元見ると思ってたのか! その通りやけどな!! 大
体……!?!? ……

「《………》」

開いた口が塞がらないとはこの事だろうか、急に凄まじい勢いで
喋り出した青年は何所で息継ぎをしているのか思わず心配になる早
口で喋り続ける。

「……要するに、白金貨三枚でも十分足元見てるちゅうこっちゃ」

「では、それで頼む」

「ちよ、ちよい待ち嬢ちゃん。ワイの話聞いとったか?」

「だが、今回は予備知識が不十分だった私に責任がある。

それを御主は丁寧に正してくれた。今回はその勉強代を差っ引い

ての白金貨三枚で構わないと言っているのだが？」

《ク…クク》

思ったままの事を口に出して伝える今度は青年が呆然とし、天目一個は声を押し殺して笑っていた。

「?..?..?
」

【Side…茜】

啞然としていた緑髪の青年は「何かワイ、この娘に敵う気がせえへん」と甚だ遺憾なことを言われたが、金塊は白金貨三枚と金貨五十枚で買い取られる結果となった。

「そういえば名乗ってなかったな。

ワイの名前は『ロータス・ローグレス』。『ローゼンベルグ公国』の首都『ルグレス』に本部がある『ローグレス通商会』を取り仕切つとる『ジュダス・ローグレス』の息子で此処『ティグリス』の支店の経営を任せてもらつとる」

「私の名は仙道茜。いや、アカネ・センドウ。

『アルヴァトロス大陸』に存在する唯一の人族の集落出身者だ」

これが、天目一箇てんもくいっこと共に考えたこの世界での私の設定だ。

『アルヴァトロス大陸』とは実のところ複数の巨大な渦潮に囲まれていて、上陸する為には的確な船と優秀な船員を揃えたとしても辿り着くかどうかは神のみぞ知るといった程に詳細を知るものが少ない神秘のヴェールに包まれた大陸だ、というのは天目一箇の言。

要するに、知る者がいないなら下手な発言で怪しまれる可能性が極端に減るという公算が高いという訳だ。

「ほー！竜人族の住む大陸かいな。

割と此処も色んな種族が出入りすんねんけど、竜人族は見たことあらへんわ」

《茜、そろそろ行かんと日が暮れるぞ》

「（そうですね）ではローグレス殿。この後、所用もありますので失礼します」

「いややわー、ローグレス殿なんて堅っ苦しい言い方せんとロータスって呼んでえな。

それより、何か探しもんか？やったらワイ、この都市じゃ割と顔も利くし相談してみんか？絶対に損はさせんで」

ふむ、少々馴れ馴れしい感じは直哉を彷彿とさせるが奴の様に下心は透けては見えない。

明確な悪意は感じられんし、自称『アルヴァトロス大陸』出身で金塊を売り込みにきた私に単純な興味を持ったのか。

矢張りここは年の功に頼るべきか。

「（天目一箇は如何思われますか？私は相談しても問題はないかと、話して障りのある内容ではありませんし）」

《悪意は感じられんし、構わんだろう。
だが油断はするなよ》

「（勿論）」

同意は得られたなら話すべき…か。

こちらに不都合な部分があれば断ればいいだけの話だ。

「実は……………」

「要約すると、茜ちゃんは里に伝わる独自の武具を造ることの出来る鍛冶師で、その『刀』とやらが外の世界で通じるか如何かを試したくてこの『ローゼンベルグ公国』を訪れたちゅう訳やね」

「概ねその通りだ、ロータス殿。
その為の工房を、あわよくば居住機能を備えた物権を探そうと思
っている」

「やったら、ええ物件があるで。

実は大通りから大分外れはしとるけど『商業区画』の『旧区画』
に最近潰れてしもた鍛冶工房が取り壊されんとそのまま残っとるね
ん。

その空き物件扱っとる不動産屋は知り合いや、仲介させてもらっ
てもええで」

「それは………」

《むう》

話が良過ぎる気もするが、正に渡りに船だ。

「会ったばかりの人間に頼むのも気が引けるがお願いできるか？」

「勿論「が」…や？」

「仮にも、貴方は商人だ。

何の見返りも無しにここまでしてくれるとは思えない…目的はなんだ」

人を疑わないことは美德かもしれないが、私はそこまでお人よしではない。

「目的で、そんな大層なもんはないんや。

ただ、茜ちゃんの口振りから考えるとギルドに登録することになるんと思うんよ。

そして『ローグレス通商会』は見ての通り、日用品から冒険に必要不可欠な特殊な道具まで取り揃えとる雑貨屋や。鍛冶師という職業の特性上から考えても、色々入用になるのは目に見えとる。

そこで、今恩を売っというお得様になってもうたらワイも儲かるっちゅうこと、お分かり？」

「すまない、私も不躰な質問をしてしまった。
改めて、仲介をお願いしたい」

「ええて、馬鹿正直に信じる奴の方が可笑しいねんから。
物件の方は任しとき！腕によりを掛けて交渉してったるさかい！
」

「ほ、程々にな」

悪い人間ではないのだろうが、この無駄に高いテンションにはついて行けそうにないな。

【Side…茜】

「交渉やらはワイに任せて、茜ちゃんはこの先の料亭で茶でも飲んでってや」とロータス殿に押し切られて、指示された料亭『三日月』へと歩を進める。

「（悪い男ではないと思うのですが、あの強引さには少々引いてしまいますね）」

《だが、一つの店をあの若さで切り盛りしているのだ。
父親が総取締役であることを差し引いても、商人としての腕が
一流であることは間違いないだろう。性格は兎も角…な》

「（ふふ、そうですね）」

変わり者だが、良い出会いになったと思う。

しかし、折角奴から遠く離れた地に来たのだから同年代で同性の友達が欲しいものだ。女子小学校では幼少の頃から仕込まれた立ち居振る舞いのせいで一目置かれていた為、慕ってくれる者は居ても友達と言える人間は一人も居なかった。中学校時代などは二年生時に何時の間にか生徒会長候補に祭り上げられ、圧倒的多数で当選してしまう始末。エスカレーター式だったことも災いしたのか小学校時代に築き上げてきたイメージのせいもあって孤高の生徒会長とし

て結局卒業まで友達は出来なかった。

心機一転、男女共学の高校に進学すれば変わり果てた奴に再会してしまうし……こう思い返すと本当に前の世界では人間関係に運がなかったことがよく分かる。うう、凹みそうだ。

《如何した、茜。

元の世界での事でも思い出していたのか？》

「（いえ、瑣末なことですから）」

それにしても、ちらほらと人族に混じって獣人族の姿が見受けられる。

獣人と一口に言っても、完全に獣が二足歩行で歩いているようにしか見えない者と、人間に獣耳と尻尾を取って着けたような者もいる。

「（一概に獣人族と言っても多種多様なんですね）」

《彼らには人と獣の血が流れているからな、その血の濃さで外見も変化するらしいぞ。

有体に言ってしまうえば、獣の血が濃ければ濃いほど姿は獣に近づき力も増すが代わりに物事を考える力が若干弱まるし、その逆も然りだ。そのどっちつかずなところが差別の対象となる時もある》

人でもなく、獣でもない存在………か。

てんもくいつこ
天目一箇から獣人族の事を聞いた時は、元の世界の人種差別と同じような問題かとも思ったが、これは根本的に違う問題かもしれない。

《まあ、深く考え過ぎぬことだ。

獣人族の差別は今に始まったことではない、根の深い問題だからな》

「（ええ、心に留めておくだけにします）」

《茜、『三日月亭』とはあれではないか》

天目一箇の声に俯きかけていた顔を上げると、オープンテラスもあるこじゃれた料亭が軒を構えていた。

ロータス殿が勧めることはあるな。

どのような甘味があるか少し楽しみだ……

「助けてッ!!」

「な、何だッ!？」

……と踏み出そうとした瞬間、路地から人影が飛び出してきた私に抱きつく。

突然の衝撃に踏鞴を踏むが何とか持ち直し、原因となった人物を観察する。

年の頃は私より少し幼い少女で、こちらを見上げる銀の瞳はその容貌と相まってこう保護欲を掻き立てられる。

そして怯えという感情がそのままダイレクトに現れているのか、煌く銀髪の頭頂部にある獣耳が垂れてしまっている。

《珍しいな、銀狼族の娘か》

「(知っているの……如何やら只の迷子の類ではなさそうです)」

《……のようだな》

この子について詳しくそうな天目一箇に詳細を尋ねようとするが、路地からゾロゾロと出てきた男たちを見て中断せざるを得なくなる。

「その娘、渡して貰おうか」

男たちの中から出てきたリーダー格の男の発言に、厄介事の空気を感じて体の力を一度抜き体の調子を整え始める。

次から次へと……全く飽きさせんな、この世界は。

#007

【Side..茜】

「うっ…ひっぐ…ぐすっ」

《厄日………だな》

如何したものか。

私は天目一箇てんもくいっし曰く銀狼族なる少女にしがみつかれ、目の前には剣呑な雰囲気を放つ屈強な男達。

衆目は何のアクションも起こさずに遠目に見守っているだけ。

明らかに冒険者風の者もちらほらと見受けられるが見て見ぬ振りか……情けない。

「(天目一箇、このティグリスのギルドはレベルが低いのですか?)」

《基本的にギルドのメンバーというのはフリーランス、ある程度までは自由だ。だから、特定の都市・街のギルドを拠点にしてそこに居つく者は稀で、腕利きの者がいないということはここティグリスは他の都市と比べて比較的平和なのだろう。

それに、難易度の低い依頼ばかりのギルドに居ても儲かりはしないし食ってはいけないからな》

「（なるほど）」

切実な問題があるということか。

確かに、このならず者と目を逸らしている人物とでは実力差があり過ぎる。だが、そうならそれで守備隊の詰め所に駆け込もうとするなり出来ることもあるだろうに。

「あゝっと、そこのお主」

「…………お、俺ッ!？」

そこで、声を掛けたのは群衆の中に居た特筆すべき特徴がないのが特徴の青年。事実であって決して悪口ではないが、兎に角何故か目に付いたので彼に頼むことにする。

「そう、お主だ。」

済まんが近くの警備隊か守備隊の詰め所にも行って助けを呼んでくれると助かるのだが」

「わ、分かった」

視線が私と男共の間を数度行き来させた後、どもりながらも頷き返し人混みを掻き分けながら走って行った。

「大人しく渡す気はないようだな」

頭目と思われる三十代半ばの無精髭を生やした熊の様な男が低い声でそう呟くと、一人の男が無骨な得物を抜き放つ。

他の賊が動かないところを見ると、完全にこちらを嘗めていることがよく分かる。

「……………はあ」

「へへへ、よく見りゃかなりの上物じゃねエの。」

一晩、俺らの相手をするってんなら許してやってもいいんだぜ？」

「残念だが、私にも相手を選ぶ権利がある」

「何ィ？」

「よく鏡を見て物を言えと言ったんだ、屑」

「て、手前エツ！！」

下種な視線を寄越してくれた礼に少し意趣返しに積もりで言い返したら、遠巻きに見ていた聴衆から失笑が漏れて男の顔がみるみると赤くなっていく。それを見て、未だに腰にしがみついている銀狼の少女の頭を優しく撫でてからそつと後ろに下がらせる。

そして、蚊が止まってみえる様な型もなにもない鈍重な動きで私に襲いかかろうとする男を真っ直ぐ見据えた。

25人からなる賊と獣人族の少女を庇って彼らに相對する見目麗しい黒髪の少女を見た人々の脳裏にまず浮かんだのは賊の凶刃に斬り裂かれて血の海に沈む無惨な姿だった。

が、その想像は良い意味で大きく裏切られることとなった。

何故なら、既に賊の数は残りたった2人で：

「セイツ！」

「ぐエツ!？」

：訂正、残るはリーダー格の男唯一人。

その顔は見るからに青ざめており、最初にあつた余裕綽々の表情は見る影もない。

因みに、得意の剣がない茜が用いたのは合気道に置ける武器術『剣取り』。

剣やそれに類する武器を素手で捌き隙ができたところへ手刀もしくは拳打を急所に叩き込み昏倒させ。

また、武器を持たない巨漢と相対した時は相手の勢いと力を逆手に取って投げる等の対処をした。

尤も、これらを成し得たのは天目一箇が権能の一つ『身体強化』の恩恵なのだが、茜の幼少から磨き続けていたずば抜けた戦闘センスも大きな一助となっていた。

「後は貴様だけだ。

大人しく縛につくなら良し、そうでないなら………」

「ぐ」

足が小刻みに震え、額から幾筋もの冷や汗をかく男に掛けられた言葉は正に最終警告。

それを理解した男は頭の中で必死に考えを巡らせる。

逃げる？これだけの人が集まっているのだから、可能性はあるかもしれない。

だが、数多くいた仲間も全員倒れ伏し、万一逃げおおせたとしても再起など到底望めないだろう。

戦う？それこそ論外だ。

賊の頭目として腕にはそこそ自信があつたが、奴と自分では実力の差があり過ぎて話にならない。

そう考え、仲間を見捨てて逃げの一手を打とうとした男の耳に複数の足音と共に金属の擦れる音が聞こえてくる。

それをこの『ティグリス』に駐留している警備隊だと確信した男の混乱は頂点に達し、言葉にならない喚き声を上げながら茜に湾曲した刃を持つ剣『カットラス』を振り下ろす。

だが、聞こえてきたのは肉が裂ける音ではなく何かポツキリと折れる音。

男が意識を失う直前に見たのものは刀身の無くなった己の剣だった。

【Side..茜】

「ガハハハ！！」

それにしても、おめエさんの腕前は大了たもんだ！」

「それは、何度も聞きました！」

女将さん！この酔っ払い何とかして下さい！！」

「はいよッ！ちょっと待ってな！！」

今、私が居るのはロータス殿との待ち合わせ場所である『三日月亭』。

レストランという大衆食堂といった方がしっくりくる感じの三階建ての定食屋兼宿屋。

個人的にも格式張った高級レストランの類よりこちらの方が断然好みだが。

あの騒動の後、遅れてやってきた警備隊の面々が気絶した賊を一人残らず縄で嚴重に捕縛していき。

その間、私と銀狼族の女の子『ミア・ヴォルフレイン』は詳しい事のあらましを説明。

結局解放されたのは夕時で大手柄を立てたご褒美に夕飯を御馳走してくれるという警備隊大隊長、たった今この『三日月亭』の女将さんに引っ立てられて行った『ガイアス・オーゼン』殿の案内で今に至る。

「（全く！どの世界でも酔っ払いというのは似たり寄ったりらしいですね）」

《そう言ってやるな。

権力を笠に着る者が往々にして多い役職でありながらあの何者にも分け隔てのない態度。中々に気骨のある男ではないか》

実際、本来なら警備隊の詰め所に行って事情聴取を受けないといけないところを免除されたのもオーゼン殿の口利きのおかげだからな。

少々、酒癖が悪いのは戴けないが。

そして、隣に座って食事をしていた少女に視線を移す。

「さて、そろそろ君の話を聞こうか？」

「……………うん」

彼女が警備隊に話したのは、この都市に来てからの話。

私がそれ以前の事について訪ねると、少女はポツポツと語りだした。

銀狼族の少女『ミア・ヴォルフレイン』の独白を茜は食事の手を止めて真剣に聞いていた。

曰く、彼女は此処『ローゼンベルグ公国』首都『ルグレス』の南方に位置する都市『ティグリス』から更に南へと下ったところにある辺境の森の中で父親と共にひっそりと暮らしていたという。

元々その森は魔獣の生息域から外れており、動植物も豊富だった為食料等にも困らず、日用品は森で穫れた物を売って入手出来たため生活に支障をきたす事もなかった。

が、少女の父親が病で急死してしまったことにより状況は一変する。

親一人子一人の一家の大黒柱である父親が亡くなったことで彼女はたった一人で生きていくことを強いられ、滅多に人里へ連れて行ってもらえなかったことが災いして頼れる者も居らず、少女が孤独と不安に押し潰されるまでそう時間は掛からなかった。

そういった経緯で、流れて着いた都市で運悪く人身売買を斡旋する組織に属する賊達に目を付けられ追われている最中に茜と出会ったということらしい。

「それで、私に助けを求めた理由は何だ？」

ミアの説明を聞いていた茜がそこで口を挟む。

何故なら、彼女がこの都市に不慣れだから警備隊の詰め所が分からないといっても、助けを請うなら茜の様な一見華奢な女性より男性の方が遙かに適任だからだ。

「ボク、小さい頃から親父の狩猟の手伝いをしてたからある程度なら見ただけで相手の力量が分かるんだ」

「成る程な。」

だが、それならそれで森で培ってきた技であの程度の賊なら撒けたと思うが」

「そ、その…恥ずかしい話なんだけどさ、初めて会った人族の男がアイツらだったから…」

「それは………災難だったな」

それは巻き込まれた茜自身も同情せざるを得ない真実。

始めてまともに接した父親以外の異性が極悪人面の集団でしかもその集団が血走った目で自分を追いかけて来たら、誰だって必死に逃げるだろうし、パニックに陥っても仕方のないことだろう。

「あ」

「それにしても、何故奴らはこの子を………」

逃走中の出来事を思い出したのか、体を微かに震わせているミア

の気持ちを落ち着かせようと彼女の頭を優しく撫でていた茜がポツリと疑問を溢す。

「それについてはワイが説明するで！」

それに応えたのは、何時から居たのか相変わらずの営業スマイルを浮かべ常に細めている目にモノクルを掛けた美青年『ロータス・ローグレス』だった。

【Side..茜】

「盗み聞きは感心しませんね、ロータス殿？」

『三日月亭』の女将さんが気を利かせて用意してくれた喧騒から少し離れた位置に用意された席に現れたロータス殿を軽く睨み付け

る。

女将さんに勧められたアルコールを摂取して気が緩んでいた。

因みにこの世界『レイアース』の成人として認定される年齢は16歳、私が飲酒をしても法律上は問題ない。

「そ、そないに睨まんというてエな。

ワイは警備隊の人間に少くしただけ話聞いただけねんて」

「はア………それで？」

「そうそう、その御嬢ちゃんのことやけどな。

獣人族ゆうんは多種多様、個体数の多い種族から絶滅寸前の種族までおるんや。そんな中でも銀狼族は既に滅びたとされる希少な種族。貴族や金持ちには少なからず下種な趣味を持つとる好事家は少なからず居る。そういった連中と繋がった故に今回の賊は金に目が眩んで御嬢ちゃんを捕らえようとした。

そういう訳や、胸糞悪いけどな」

出会ってから間もないが一度も絶やしたことのない営業スマイルを解いて、心底胸糞不愉快だという感情を隠しもせず話すロータス殿。

何所から調達したのかグラスを片手に赤ワインを口に行っている。

《我もこの男と同感だが、問題は彼女の今後の進退だな》

「（それについて一つ提案が）」

これは彼女の身の上を聞いた時から考えて事だが…

「ミア、私が開く鍛冶屋で働いてみる気はあるか？」

「え？」 《成る程》

「茜ちゃん、本気かいな。犬や猫やないんやで？」

酷い言い方かもしれないけど、何も自分から面倒事を背負い込むことない「ロータス殿」………はい、余計な口は挟みません」

忠告は感謝するが、空気は読んで欲しい。

「それで、どうする？」

私個人としても鍛冶師としての業務に集中したいから、住み込みで掃除等の家事全般を頼みたいんだが」

「だけどボク、コイツの言う通りならセンドウさんに迷惑…かけるかも」

「コ、コイツて」 or z

ま、当然の反応だとは思うが…ここで彼女を放り出せばまた同じ輩に狙われる可能性も高いだろうし、今回の騒ぎで獣人族に対する雇用にも少なからず影響を与える筈。

成人に満たない年齢でこの容姿、都市というのは大きければ大きい程裏の面も比例して肥大する。

この世界に來た初日に彼女に会ったのも何かの縁、ミアが騙されるか何かでむざむざとそういう類の職業に就くかもしれないの見過ごすのは私としても寢覚めが悪い。

勿論、私はそういう職業は都市に必要な側面もあると考えているが、それに就くか如何かは誰かに強制されるのではなく自分で決断すべきだと思う。

「何もずっと私のところで働けという訳ではない。

一度、腰を落ち着けてよく考え抜いた上で成りたい職業が出来たなら直ぐに辞めてもらっても構わないよ。

それに、賊の数十人程度では私を傷付けることなどできんから安心しろ」

《今なら像でも素手で倒せそうだしな。ハハハッ》

「ミアちゃん、ここは茜ちゃんの好意に甘えたらどう「センドウさん！」…………無視かいな」orz

「お世話になります!!」

…………あ、あとそのペンダントさっきから凄い音してるけど」

「ん?大丈夫大丈夫、こう見えて結構頑丈だから」

先刻から私の手の中で天目一箇てんもくいつこの依り代たる勾玉がギシギシと軋

みを上げているが、彼とのリンクはこちら側から強制的にカットしているから悲鳴は聞こえない。

そして、輝が入る度にまるで巻き戻しのように修復されていく様は中々に不可思議だった。

ミアに徹底的に無視されて落ち込んでいたロータス殿も復活し、鍛冶屋の物件についての報告を聞かされた。

一年前に閉店した鍛冶屋は今でも定期的に清掃はされており何時でも再び使用できる状態。

家具等は必要最低限揃ってはいるが、それでも人が住もうと思えば色々と物入りらしい。

その殆どをローグレス通商会で取り揃えることが可能、できるだけ安く引き受けてくれるらしいので明日纏めて一括購入することになった。

そこで今日はお開きになり、ローグレス殿は退散。

私とミアは『三日月亭』に宿を取るが、一人部屋にしか空きがなかったなので今は彼女と一緒にの床についている。

ミアは精神的に肉体的にも消耗していたのだろう、布団に入って早々眠りについていた。

視線を窓に移すと木造の枠に詰められたガラスを挟んで、夜空に

は元の世界の月とは違い幻想的な銀の光を放つ天体が輝いている。

「(……………本当に違う世界なんですね)」

《不安か?》

「(不安がないと言えぱ?になります。
だけど、私には天目一箇が居ますから)」

これは私の本心、彼でなければもっと大変だったかもしれないから。

《そ、そうか》

「(ふふ、照れているのですか?)」

《……………早く寝ろ》

「(はい。おやすみなさい、天目一箇)」

不貞腐れたように言い捨てて全く反応しなくなったことに、笑いを堪えながら私は眠りについた。

明日から始まる本格的な異世界での生活に対する沢山の期待と少しだけの不安を胸に抱きながら。

登場人物紹介？（#008時点）

■仙道茜（17） せんどうあかね

物語の主人公にして微不幸属性持ちの元女子高生。

●身体能力の向上

宿主の身体能力を飛躍的に向上させる権能。

茜の場合、幼い頃から常人では耐えられないレベルの過酷な修練を積んでいた為、軽く人の域を超えてしまっている。

それでも獣人族の瞬発力や竜人族の斥力には敵わないので、今後
も修練は継続して行うべきである。

●不老長寿

宿主の体のコンディションを常に最高の状態に保つ権能。

二十歳前後で老化が強制的に止まり、筋肉の退化などを抑止する。
体に異常を来す毒の類も自動的に排除することも可能。

副次的な作用として寿命が最長で150年程延びる。

●製鉄・鍛冶

天目一箇神の象徴たる権能。

『製鉄』は実在する玉鋼から架空の物質であるオリハルコンまで
鉱物という定義に当て嵌まる物なら好きなだけ取り出せる能力。

『鍛冶』は武器などを造る知識を与え、才を引き出す能力。天目
一箇と波長が合う、その事自体が茜に鍛冶師としての才があるとい
うことであり、この能力はそれを最大限に引き出す効果がある。

■天目一箇(???)

ジ・アース側の神の石柱にして茜のサポート役。

日本神話の製鉄・鍛冶を司る神で正式な名前は『天之麻比止都禰命』『天久斯麻比止都命』。

■ミア・ヴォルフレイン(15)

絶滅したと思われていた銀狼族の生き残りの少女。

この小説『最優の鍛冶師』のマスコットキャラクターになる予定。

■ロータス・ローグレス(21)

ローゼンベルグ公国でも指折りの商家ローグレス家の跡取り息子。

■鬼道直也きどう なおや(17)

『ランバース王国』によって召喚された勇者で全ての元凶。

その内、登場する筈？

■ガイアス・オーゼン(35)

ティグリスに駐留している『ローゼンベルグ公国・ティグリス方面・第八警備大隊』の大隊長。

■女将さん(42)

三日月亭の女主人。

翌日『三日月亭』を出発した茜と天目^{てんもくいつこ}一箇、ミアは先にロータスと合流。

彼の案内で、これから彼女達が生活するであろう工房兼自宅を指して歩を進めていた。

改めて説明するが此処『ティグリス』は四方を高い城壁と水の流れる大きな堀に囲まれた都市で、北方と西方と南方に巨大な門と跳ね橋が架かっている。

正門として使われているのは西門。その西門から東に向かってのびる中央通り『メインストリート』から南北に広がるように大小様々な商店が建ち並ぶ『商業区画』、北門と南門を繋ぐ『サブストリート』を沿うようにして南へと流れる河川を挟んで東側には『住宅街』と『ローゼンベルグ公国』現大公『ギルベルト・ローゼンベルグ』から『ティグリス』を任された領主の住まう屋敷が存在する。

因みに、住宅街は市民が住む賑やかな場所と富裕層が住む閑静な場所とで区画が分けられている。

そんな都市の入り組んだ路地を先導する『ロータス・ローグレス』に、先程まで辺りを興味深そうに眺めていた銀狼族の少女『ミア・ヴォルフレイン』も流石に延々と続く光景に飽きたのか足取りも重い。

「ねエ、まだなの？」

「も、もうちょいやから、我慢してんか」

昨夜の『三日月亭』での出会いから折り合いの悪い二人だが、ミアの余りな物言いにロータスのこめかみにはくつきりと青筋ができていた。

それでも怒鳴ったり喚き散らさないのは、大人としての意地かはたまた別の何かか：「ここで怒鳴ったらあかん。アカネちゃんに幻滅されてまう」：如何やら多分に個人的な思惑が何割かを占めてはいるようだ。

「ミア、ロータス殿は決して君の事を害するような人族ではない。だから、そう厭わないでやってくれないか？」

「…………分かったよ、アカネさん。」

ゴメンナサイ、ローグレスサン」

「ええて、気にしとらんから」

「うん、良い子だ」

「エヘヘ」

茜の一言で反省し、それを言葉で表す彼女は本来素直な性格なのだろう。

それでも茜を除いた人族に少々棘々しいのは昨日の一見を考慮すれば仕方がないことかもしれない。実際、ロータスに謝ったものの口調が完全に片言だった。

こればかりは精神的なものなので、時間が解決するしかない茜

は考えていたし、人生？経験の長い天目一箇も同じ見解であった。

閑話休題

目的地である鍛冶工房は建物がひしめき合う『商業区画』の中でも古い商店が軒を連ねる『旧区画』の奥まった場所にある。

元々は、鍛造の強度に優れた武器を提供する隠れた名店だったのだが、時代が進むに連れてコストと時間の掛かる鍛造式ではなく、材料（主に鉄・アルミ合金・銅・真鍮などの金属）を融点よりも高い温度で熱して液体にした後鑄型に流しこむ鑄造式が主流となり、跡継ぎができぬまま店主も亡くなり工房の火は今も途絶えてしまっただけだ。

店主の知人で店の所有権を所持している不動産屋も直ぐに取り壊すのは流石に気が引けたのか定期的に掃除やら補修をしていたのだが、何せ店一軒でも維持費は結構な額が掛かるのでそろそろ取り壊しも止む無しという状況にまで切迫し、故にロータスを通じて茜が工房を借用したいと申し出たことは不動産屋にとっても悪い話ではなく彼は喜んで承諾し、家賃に関しても向こう一年格安と言っても過言ではない価格になった。

【Side…茜】

「此処が……………」

「そうや。

今日から、この工房の火は茜ちゃんが灯すんや」

《我は工房の方がしっかりしていれば問題はないが……………ふむ、中々に立派な建物だな》

一度訪れただけでは迷子になりそうな路地を進んで辿り着いた場所に建っていたのは、想像していたよりも大きくしっかりとした佇まいの建築物。

正面玄関と思われる屋根の部分には看板が掛けてあった名残か日に焼けて色褪せることなく残った部分が、この場所で人の生活が営まれていたことを窺わせる。

「ほな、入るか」

「ああ」

ロータス殿に促されて工房の正面玄関を潜り、一通りの探索を終えた私達は店内へと戻ってきていた。

まず店内は、多少埃が積もってはいたが刀剣など置いておく陳列棚や天井・壁・床には目立った損傷はなく、これから使っていく上で何ら問題なさそうだ。

ただし、所々に年数的な耐久限界が来ている思わせる部分があり、大工などの専門職人に一度見てもらう必要があるだろう。窓ガラスも同様で、総取替えとまでは言わなくても何枚かは変える必要があった。

店に隣接されて建てられた二階建ての居住区は、一階に三部屋、二階に三部屋の計六部屋。

十畳一間の洋室風の部屋には木組みのベッドと机に簡易クローゼット。こちらに必要なのは私とミアの二人分の布団と衣類。

「えーと、先ずは知り合いの工務店に保全修理を頼んで：後、ガラスもやね。

布団はワイの店で取り扱ったりから問題ないとして、服屋も安ウしてくれる所紹介するから茜ちゃんとミアちゃんが直接行ってな」

「了解した」

「ほんで一番重要なのは精霊石やね」

「……………精霊石」

『精霊石』については前日に天目一箇てんもくごうから解説を受けている。

『アルヴァトロス大陸』全土で採掘される『魔石』を『魔術』によって加工したのが『精霊石』。その用途は多岐に亘り、都市の様々な場所で使用されている。

『火の精霊石』が司るのは『炎』と『熱』。

火を自在に放出することができる『炎』は調理関係に、一定空間の気温を上昇させることができる『熱』は暖房器具として利用されている。

『水の精霊石』が司るのは『流』と『冷』。

水の流れに力を加えることができる『流』は下水関係に、一定空間の気温を奪うことができる『冷』は生鮮食品の保存に利用されている。

他の『光の精霊石』『風の精霊石』『地の精霊石』も含めて、この世界『レイアース』で生きていく上で必要不可欠な存在なのだ。

「……………『火の精霊石』は炊事場と洗面所、各部屋の分の計四つ……………『水の精霊石』は炊事場と洗面所、手洗いの計三つ……………『光の精霊石』は要所要所に設置やから計六つ」

『精霊石』とは三百年前の魔族による大侵攻『ギルフォート大戦』において『勇者』として召喚された異世界人が戦後に考案し開発された物らしい。

そして彼は『精霊石』の扱いについての法案の取り決めに大戦時に受けた傷を押しながら各国を奔走し、遂には各国にそれを認めさ

せることに成功したそうだ。

―1. 『精霊石』を各国共有の財産とする。故に、これを一国が独占する事を禁ずる―

―2. 『魔石』の年間採掘量は年に一度の各国首脳会議で決定することとする。故に、これを規定量を超えて採掘をする事を禁ずる―

―3. 『精霊石』の使用は日常生活の場に限ることとする。故に、これを兵器に転用する事を禁ずる―

これが『アルヴァトロス大陸』における『精霊石』に関する三ヶ条。

基本的に『魔石』から生成された『精霊石』はその使用頻度によって耐久年数は変わるが、少なくとも三十年はその効力は切れることはない。

『ランバース王国』『レグザール帝国』『ローゼンベルグ公国』『バレスティナ共和国』の四ヶ国に存在する四大採掘場で採掘が可能な『魔石』だけで今後三百年必要になるであろう量は十分確保できる計算らしいが、元の世界『ジ・アース』と同じく資源は有限という考えなのだろう。

「これに必要なモンのリストは揃った。

ほな『布団』と『精霊石』はワイんとこで揃えて、ガラスを含めた『補修工事』も知り合いに直接頼んどくから、アカネちゃんとミアちゃんには自分らの当面必要な衣類を頼むわ」

「うむ。何から何まで済まんな、ロータス殿」

「あかん、あかんでアカネちゃん。

こういう時は謝るんやのうて、笑顔で「ありがとう」やで？」

そういうものなのか、なら…

「ありがとう、ロータス殿」

「……………」

む、言われた通りに私にできる最大限の笑顔で応じたのだがな。
ロータス殿は口元と鼻を手で押さえて蹲るし、ミアまでもが赤く染めた頬を隠す様に顔を逸らしてしまっている。

「（天目一箇、私何か拙いことしましたか？）」

《まあ…そのなんだ。

余り人前で笑顔を見せるな、ということだな》

「??.?」

私の疑問に答えてくれた相棒の言葉は、分かるような分からないような不明瞭なモノだった。

何だというのだ、全く。

閑話00

『ランバース王国』。

それは『アルヴァトロス大陸』の『ギルフォート山脈』を挟んで右側、人族と獣人が住む土地の南方に広がる大平原を支配している国の名前である。

この国は完全な貴族至上主義で形成されており、極端な言い方をすれば地位の高い人間は平民の事を奴隷の様に扱い、獣人族に至っては家畜同然に考えている節がある。

故に、四ヶ国の於いて最も獣人族の人口が少ない国でもあるのだ。

それでも三百年前、『ギルフォート大戦』が勃発する前後は王族・貴族共に『ノブレス・オブリージュ』、財産・権力・社会的地位の保持には責任が伴うことを重々承知しながら国を統治してきた。

だが、三百年という長い時間は国を腐らせ人を墮落させ、今では『ジ・アース』側の歴史と同じ様に『ノブレス・オブリージュ』とは貴族などの特権と贅沢を正当化する隠れ蓑と同義の言葉となっている。

そんな末期とも言えるこの国が抱えている問題は何も内側だけではなく、北部に君臨する『レグザール帝国』がここ数年で国力が目に見えて上昇し軍備も徐々に拡大傾向にあるという、外側にも大きな問題が浮上していた。

そこで王国の上層部が考えたしたのは、三百年前に召還した伝説の『勇者』の再来。

永い『レイアース』の歴史において異世界から召還されし者は強

力無比な力を持ちいて度々世界を救ったと記され、彼らは何時しか『勇者』と呼ばれ表されるようになっていった。

その『勇者』を表向きは最近頻発するようになった『魔族』との小競り合いを理由に召還し、『名』を以て『内側』の安定と平定を謀り、『武』を以て『外側』に対する牽制とする。

腐敗した王権に群がる者達が考えたにしては中々理に叶った策略かもしれないが、彼らの唯一の失敗は『召還の儀』において巫女が詠む勇者の資質を左右する『祝詞』を勝手に改悪してしまったことだろう。

《我は乞う、汝異なる世界に住まう者。

我は求める、汝彼方の神を宿せし者。

我は願う、汝慈悲深くも勇敢なる心を持って世界を救う者。

……今此処に世界を結ぶ縁を成し、世界を繋ぐ陣と成す》

重要な部分のみを抜粋してはあるが、これが三百年前に詠まれた『祝詞』。

《我は乞う、汝異なる世界に住まう者。

我は求める、汝彼方の戦に秀でし神を宿せし者。

我は願う、汝欲に忠実も大いなる力を持って王国に栄光を齎す者。

……今此処に世界を結ぶ縁を成し、世界を繋ぐ陣を成す》

そしてこれが今回の『祝詞』。

二文目はそのまま『ジ・アース』側に語り継がれる八百万の神々の中においても『戦技』に秀でた神を、三文目は己が欲望に忠実でありながらも王の意に沿わない行動をしない者を指している。

要するに、強大な力は勿論のこと、無欲よりも自分の欲望に素直な方が組しやすく御し易いと踏んだのだ。

このような経緯で選ばれたのが『鬼道直也』きじょう なおやであり、召還の瞬間近くに居た茜はとっばちりを受け異世界に召喚される結果となった。

そして茜がこの異世界で新たな一步を踏み出そうとしている頃、直也は召還を行った『ランバース王国』首都『デルカ』の城『コートクレス城』の一室で食事をとっていた。

「勇者殿はアチラ側でもさぞ優秀な人物だったのでしょいうな」

「いえ、それ程では」

「ははは…謙遜なさるな。

娘もソナタの事を一目で気に入ったようだし、これは将来が楽しみだ」

「もう！お父様ったら」

豪華絢爛な装飾と家具で固められた王族専用の部屋に居るのは直也以外に、この国『ランバース王国』最高権力者『モルド・ローゼンベルグ』とその娘である第一王女『マリア・ローゼンベルグ』、そして大勢の侍従達が控えていた。

因みにテーブルの上には、『勇者』の歓迎の意思を表すかのように贅を尽くした数々の料理が並べられ食欲をそそる香りと共に湯気を立ち昇らせている。

そんな部屋の上座の席にドツカリと座る国王の口髭と顎鬚はファントジー小説によくある威厳ありげな形で整えられているが、欲に濁った瞳と脂ぎった脂肪に包まれた肉体が全てを台無しにしていた。

対して王女は本当に父親と同じ血が流れているのか疑ってしまう程に美しい金髪ロングの美少女で、清楚な純白のドレスに隠し切れない蠱惑的な肉体を保持している。

「ですが、私も国王陛下のお力になれるように粉骨碎身この『ランバース王国』の為に働く所存です」

「そうか！そうか！期待しておるぞ、勇者殿！！」

マリー、彼の酒がきれておるではないか。注いで差し上げなさい」

「はい。勇者様、グラスを」

丁寧な口調ではあるがどこか己の力を過信しているような慇懃無礼な直也の言葉にも気を良くした国王は通常なら侍女の役目である

御酌を娘に命じ、王女も迷いなく父の言う通りグラスに極上の赤ワインを注ごうとする。

「…勇者様なんて大仰な呼び方、君にはして欲しくないな」

「で、では直也様と」

「ありがとう、マリー」

「はい」

それを一度遮り向こうの世界『ジ・アース』では使い慣れたお得意のスマイルで王女の心を鷲掴みにする。

異世界に跳ばされても女性を自然と口説くこの男は果たして英雄の器たるのか、はたまた唯の馬鹿で終わるのか……それは後の歴史が証明するだろう。

要するに言わぬが花である。

国王は利用すべき偶像の英雄と溺愛する娘を前に本性を隠し、勇者は己の置かれた状況を理解しようともせず欲に走る。

空気に敏感な人物ならこの異質な空気の晚餐に顔を顰めたかもしれないが、花よ花よと甘やかされた無知な王女と王族の顰蹙を買わないように必死に縮こまっている侍従達が気付くことはなかった。

「……………」

唯一人の侍女を除いて…………

「ただ今、戻りました王妃様」

「御苦労様でした、ローズ」

「は」

先程まで晚餐会に立ち会っていた赤毛の侍女が入室したのに気付
き、王の後である『セリア・ローゼンベルグ』は王妃に与えられた
部屋の家具にしては質素だが品のあるソファ―に座り月明かりを頼
りに目を通していた本から顔を上げる。

『ローゼンベルグの至宝』とまで歌われたその美貌は今や四児の
母であることが信じられぬ程であり、寧ろ年月を重ねるに連れ色香
は増すばかり。

だが彼女はその立場に驕ることない心優しくも真っ直ぐな性格で
その慈悲深さと清廉潔白さは周知の事実であって、圧政を強いられ
ている国民にとって唯一の希望でもあった。

実際、国王が余りに無体な政策を実行しようとした時などはその
身命を賭して法律の公布を止めたこともあったほどである。

「それで件の勇者殿は如何でしたか？」

「はい。」

容姿は見目麗しく、頭も悪くは「ローズ」…は」

「私は貴女自身の感じた率直な感想を聞いているのですよ」

そう質問した王妃の眼には先程まで湛えていた優しさは微塵も見当たらず、突如豹変した鋭利な視線に貫かれた侍女に扮した密偵である『ローズ』は背中に冷たい汗が流れたのを感じる。

と同時に、我が主はこの方に措いて他にないとローズは自分の過去の決断に対する確信を深めた。

「…………私見ですが、この王国にとって毒にはなっても薬になるとは到底思えません」

置かれた状況を理解せず、国民の血税で賄われた贅の極みのような料理の数々を感謝の意を示さずに貪り、王族の一員である王女に人目を憚らず色目を使う男がこの国を救えるとはローズには考えられなかった。

「…矢張りそうですか」

「矢張りとは？」

「先刻『北の巫女』から予知した未来を但し書きした書状が届いた

の、読んでみなさい」

王妃から手ずから渡された紙にはこう書かれていた。

『異世界より招かれた神を宿せし禍星^{まがつぼし}とはぐれ星。

片や破滅を、片や救いを齎^{もたら}すであろう。

汝ら国を憂いし者よ、王国の崩壊は混沌たる世界の始まりを報せる鐘と知れ』

「!?!?…王妃様、これは!?!」

「ええ、既に事態は切迫しています。

貴女は部下に命じてここに記された『はぐれ星』の搜索と『北の巫女』との連絡パイプの構築。

そして万が一の時は私の指示で動いてくれる騎士団には国民を、貴女には『リリア』のことを頼みます」

「は!」

茜の与り知らぬ遠方の地で、滅びに気付かぬ者と滅びに抗う者の物語も幕を開けようとしていた。

異世界での新生活の始まりから既に数日、周囲の家や店への挨拶周りや補修工事の完了した家の清掃と家具の搬入に忙殺される日々も終わりを迎え、茜は鍛冶作業に没頭していた。

鍛冶工房があるのは表の店舗の奥まった通路の先にある階段を少し下った場所に併設されており、長期間火が灯ることのなかった炉に炎の息吹が再び宿り連日煙突から黒煙が上がっている。

勿論、そんな室内も何の対処もしなければ余りの高温で茜自信に危険が及ぶのだが、追加購入した『風の精霊石』による換気と『水の精霊石』による室温調整のお陰で鍛冶に支障がない程度に快適な空間が完成していた。

それでもこまめに水分を摂らなければ脱水症状を引き起こす程度には暑いので、茜も最初の頃は汗を吸って直ぐに重くなる下着に辟易としていたのは余談である。

因みに、この鍛冶工房は現在『天目一箇』から与えられる第五の権能『天岩戸』あまのいわとによる見えない結界に準ずる一種の加護に包まれている。

『天岩戸』あまのいわとの能力は二つ。

一つ目は天目一箇の契約者、茜の意志をその空間内でのみ限定的に反映する能力。

例えば、対象が架空の物質であろうと茜が真に望みさえすれば、通常の炉でも『ミスリル』を溶かし、市販されている凡庸な鎚でも『オリハルコン』を平たく打ち延ばすことができる。

二つ目は式神と呼称される人型を使役する能力。

あまのいわと

『天岩戸』内でしか活動できない上に単純な命令しか受諾することができないのだが、自身の身の上を明かせない為人を雇うことのできない茜にとっては貴重な存在である。

閑話休題

第三の権能『製鉄・鍛冶』の『鍛冶』から得た知識の照らし合わせが一通り終了し天目一箇との相談の結果、記念すべき一振目は『玉鋼』製の『刀』かたなに決まった。

そして、茜の一ヶ月長にも及ぶ長い闘いが始まった。

一．『水へし・小割り』みず かわ

玉鋼を熱して厚さ5m程度に打ち延ばし、次にこれを2×2.5cm四方に小割りしてその中から良質な部分を3〜4Kg選び出し直接の材料とする。

二．『積沸し』つみかわ

小割りにされた材料を梃子に積み上げて炉で熱する。
この過程で素材が充分に熱せられた一つの塊となる。

三．『鍛錬・皮鉄造り』たんれん かわがね

炭素の含有量を調整し不純物を除去するために鍛錬を行う。

鍛錬の方法は充分沸かされた素材を平たく打ち延ばし、さらに折り返して2枚に重ねる。

この作業を約十五回程度行うが、特にこの工程の前半を下鍛えしたぎた、後半を上鍛えあげぎたという。

鍛錬によって、いわゆる皮鉄（Ⅱ軟らかい心鉄をくるむ、硬い鉄のこと）が作られる。

十五回ほどの折り返し鍛錬の結果、自乗計算すると約33,000枚の層状となり、日本刀が強靱である理由のひとつがここにある。

四・『心鉄造り・組み合わせ』しんがね

皮鉄造りに前後して、心鉄を作る。

日本刀は『折れず・曲がらず・よく切れる』という3つの条件を追求したものだが、切れるためと曲がらないためには鋼は硬くなければならぬし、逆に折れないためには鋼は軟らかくなくてはならない。

この矛盾を解決したのが、炭素量が少なく軟らかい心鉄を炭素量が高く硬い皮鉄でくるむという方法。

これは日本刀製作の大きな特徴となっている。

くるむ方法、つまり組み合わせには『甲伏せこうふせ・本三枚ほんさんまい・四方詰しほうづめ』など多くの種類があるが、これは時代・流派・個人によって異なる。

五・『素延べすのべ・火造りひづくり』

皮鉄と心鉄の組み合わせが終わると、これを熱して平たい棒状に打ち延ばす。

これを素延べすのべといい。

素延べが終わると、小槌こづちで叩きながら日本刀の造り込みの作法に従って形状を整え、さらにセンスキ鑪やすりで肉置きを整えまる。

これが火造り。

六・『土置き（土取り）・焼き入れ』

耐火性の粘土に木炭の細粉、砥石の細粉を混ぜて焼刃土やきばつちを作る。
これを刃文の種類に従って、土塗りをしていく。

焼きの入る部分は薄く他は厚く塗り、これを約800度くらいに熱して頃合いを見て急冷する。

七・『仕上げ・銘切りめい』

焼き入れが終わると、曲がり・反りなどを直して荒砥ぎをする。

最後に刀身に疵きずや割れができていないことを確認し、中心なかの鑪仕立めくざあなてを行い目釘孔を入れ、最後に作者の銘を入れる。

「……………出来た」

以上大きく分けて七つの工程を踏破し、茜がその生涯で初めて打ち抜いた『刀』が三振完成した。

茜がその内の一振に部屋を照らす『光の精霊石』の光を浴びせると刀身は妖しく光り、刃文は鎌倉時代の初期に興った備前国の日本刀刀工の一派『福岡一文字』の初期の作品に見られる『直刃小丁子乱れ』に似通い、鑿たがねには『仙道茜せんどうあかね』と達筆な文字で刀工の銘が切られているのが分かる。

《業物80工にさえ遠く及ばないが、悪くない出来だ。
名は決まっているのか?》

「ええ、『玉鋼』製の刃長二尺（60.8cm）の『刀』、和名『かげろう陽炎』。」

私専用を目釘穴を二つ開けてある居合いに特化し、真打でもあるこの『刀』の名は『陽炎・龍』たつです」

《『陽炎』……良い名を貰ったな》

まるで刀自身に語り掛ける天目一箇を不思議に思った茜だったが、その声にまるで応えるかの様に一瞬『陽炎・龍』が脈動した気がして不思議と暖かい気持ちになっていた。

【Side..茜】

「ほく、これがアカネちゃんが言うと思った『刀』かいな」

「……………綺麗」

「まだまだ造りは粗いがな」

木製の黒塗りの鞘から抜刀した『陽炎・龍』に魅せられ、ロータス殿は興味深そうに、ミアは目を輝かせて刀身を見詰めている。

本来刀身だけでは『刀』は完成とは言えず、刀工である私が打った刀身を『研師』^{とぎし}が研ぎを行う事で始めて完成と言えるのだ。

他にも、鞘の作成を行う『鞘師』^{さやし}、はばきや鰐などの金属部分を作成する『白銀師』^{しろがねし}、柄部分に紐を巻く『柄巻師』^{つかまきし}、鞘や鰐などに装飾を施す『塗師』^{ぬりし}『蒔絵師』^{まきえし}『金工師』^{きんこうし}が存在するが私にも『鍛冶・製鉄』の神である天目一箇にもその様な芸当は出来ない為、『陽炎・龍』を『ジ・アース』側の神の石柱である『天之尾羽張』^{あめのおはばり}に送り仕上げを依頼した。

『天之尾羽張』^{あめのおはばり}は、日本神話に登場する刀であり、また神の名前でもある。

彼は天目一箇とは懇意の仲で私との相性は天目一箇に次いで二番目だったらしく、もしかしたら私のパートナーになる可能性もあったそうだ。

その縁で今後、私が造る刀身の仕上げは彼が担当することとなり、その経緯で『陽炎・龍』は黒一色で統一された鞘と柄、そして仙道家の家紋を模倣した蓮の鰐^{はす}を装飾され、『刀』は真の完成を見たのだった。

「素人のワイが見ても特殊な武具っちゅうんは分かるんやけど、どないな方法で販売するんや？」

「取り合えず、武具は『直刀』ちよくとう 『太刀』たち 『小太刀』こたち 『刀』かたな 『脇差』わきざし 『短刀』たんとう 『剣』つるぎ 『薙刀』なぎなた 『槍』やり を一振ずつ用意して、後は注文があり次第だな。

ただ、『刀』については『陽炎・龍』の影打が二振あるから一振だけでも早速展示しておくか」

防具に関しては『手甲』てっこう 『甲掛』こうかけ と『鎖帷子』くさりかたびら を考えているが、これ売るか如何かは未定。

それと破邪の鉱物を用いたアクセサリも造る予定だが、こちらは比較的製作が容易な為、呪い^{まじな}程度の効力がある物は市販する積もりでいる。

「あんまり儲ける気はないみたいやね。まア、らしいとは思うけど。……そしたら、ギルドに加入してみるのはどうやろ」

「ギルド……か」

見聞を広める為に一考の余地はあるか。

#011

『ギルド』。

それは一般人から果ては一国の主まで、依頼の内容に見合う報酬さえ用意できれば誰であろうと利用できるいわゆる『何でも屋』である。

その本部は四ヶ国の中でも最も商業の発展した『バレスティナ共和国』首都『ヴァンエルハイム』に在り、『ギルド』創設者『ギリアム・ライトフォード』の理念を真に継承した者のみが続括、俗に言う『ギルドマスター』を代々引き継いでいる。

依頼である『クエスト』の種類は多岐に渡り、品物を迅速且つ丁寧に目的地まで運ぶ『運搬クエスト』、一般人では辿り着けない場所に存在し入手が困難な鉱物や植物を取ってくる『採掘・採取クエスト』、大量の荷物を一気に運搬する商隊や命を狙われている要人を警護する『護衛クエスト』、特定の国に期間限定で雇われ国命に従事する『傭兵クエスト』、危険指定生物や指名手配された賊を倒す『討伐クエスト』、未開の森や新たに発見された遺跡などを調査する『探索クエスト』、行方不明になった人物や盗難にあった宝物を探し出す奪還する『搜索クエスト』が存在する。

そしてギルド内での発言力や市井での知名度に関わってくるのが『ランク』。ランクには『S・S・A・A・A・B・C・D・E・F』の九段階があり、達成したクエストがある規定値に達すると本部から支部へ上位ランクへの昇格通知が届き、より難易度の高いクエストに挑戦できるようになる。

因みにギルドに所属している者達は『ランカー』と呼ばれ、Aランク以上の猛者には『二つ名』が与えられる場合がある。

更にギルドに所属していれば様々な特典もある。

一つ目は『ランカーカード』。これは一種の偽造不可能な身分証明書であり、国境の検問などの通過時等にカードを提示すれば何らかの非常警戒時でもない限りは比較的簡単に他国へ入国が可能。

二つ目は『情報』。ギルドは国家の諜報機関にも勝るとも劣らない情報収集能力を有しており、申請すればランクに応じた情報までなら手に入れることが可能。

メリットも多々あり一見自由に思えるギルドだが、クエストに失敗すれば先に支払った補償金は還元されず場合によっては違約金が発生するなどのデメリットもある。勿論、失敗が続いたり一定期間以上クエストを受けなかったりすると降格もありうる。

そして万が一、ランカーの名を笠に着て犯罪を行った場合はギルドマスター直属の懲罰部隊『パージ』によって粛正される。

「――以上がギルドの概要となります。

何か質問は御座いますか？」

ロータスからギルド参加の提案を受けてから翌日、茜とミアはギルドのティグリス支部へと足を運び、この受付嬢『セツテ・オクロックス』からギルドに関する説明を聞いていた。

店舗の方は見本となる武器が一通り揃ってから開店しようと、茜

と天目一箇が取り決めたので『嚴重』に戸締まりをして出てきている。

「いや、私は特にないな。懇切丁寧な説明に痛み入ったぐらいだ。
ミアは如何だ？」

「…………ボクも特にない」

セツテの問いに、未だ茜以外の人族に対して警戒心を持っている
ミアは体の半分以上を茜の体で隠して返答した。

「クスッ……では、お二人の『ランカーカード』をお作りしますの
で少々お時間を頂きますが宜しいでしょうか？」

「構わない」

そんなミアの如何にも「ボクはお前の事を警戒してるぞ！」とい
う態度に、逆に微笑ましさでも感じたのか一瞬だけ営業用ではない
本当の笑顔を垣間見せたセツテ。

直ぐに元の表情に戻していたが、茜には彼女の心根の優しさが感
じ取れた。

ミアと暮らすようになってから一ヶ月、獣人族の中でも珍しい銀
狼族である為に好奇の視線に晒されるのを間近で見てきた茜にとっ
て彼女に好意的な態度を取ってくれる人族がいたことが何より嬉し
かった。

「……ハッ!？」

ま、待たれている間に掲示板に張られているクエストをご覧になっておいて下さい!依頼によっては直ぐに始められるますので!」

「あ、ああ」

「「「……………」」」

だが、天目一箇をして「余り人前で見せるな」と言わしめた笑顔を間近で見ってしまったセツテは数秒間見惚れてから我に返り、言うべきことを早口でまくし立てた後、赤く染まった頬を隠しながら奥へと脱兎の如く入っていた。

この日、彼女がこれまで築き上げてきた『常に落ち着いていて、ちよっと仕事のデキる受付嬢』のイメージが若干崩れてしまったのは言うまでもない。

【Side..茜】

《ふむ、殆どがFランクの茜でも受けることができる討伐クエストばかりだな》

「（私が討伐クエストを受けるのを前提としているのは気に入りますが、高ランクの討伐クエストが無いというのはこの都市の治安の良さの現れではないですか？

……逆にランカーの全体的な質は多少落ちるようですが）」

クエストが貼られている掲示板から少し離れた場所にランカー同士が話し合う為に設けられたと思われる複数のテーブルにちらほらとランカーの姿が見受けられるが、初見では警備隊大隊長のオーゼン殿程に腕が立ちそうな兵^{つわもの}は見当たらない。

強いて挙げるならアックスを担いだ虎と思しき獣人族の男性だろうか。あの強靱な肉体と超重武器から放たれる一撃は中々のものだろうと推察できる。

まあ、圧倒的な実力差がない限りは戦い方次第で格上の相手と渡り合うことも不可能ではないので余り強さばかりに拘っても仕方が無いのだが。

御爺様も戦いに於いて最終的に必要なのは決して生きること諦めない不屈の意志と死地へと一歩踏み出せるだけの一握りの勇氣だと言っていた。

実際、修行と称して放り込まれた日本か如何かも怪しい秘境の奥地で野生の熊と対峙し満身創痍になりながらも辛うじて討ち果たし

た時に私は実感した。

「（そんなことより、今はクエストですね。

できることならこの『陽炎』^{かげろう}の切れ味を試せる魔物を討伐できるクエストはないでしょうか）」

《……言おうか言うまいか前々から迷っていたのだが。茜よ、生まれてくる性別をまアダダダダッ!?》

言われずともそんなことは分かっている！

貴方は知らないだろうが、趣味が心身の鍛練と刀剣鑑賞の私が何度それに類する台詞を聞かされてきたことか!!

全く、神も鳴かずに割られ……雉を鳴かずに撃たれまいに。

「あ！アカネさん、これ如何かな？」

「どれどれ……」

乙女心を傷付けた輩に折檻を加えていると、私とは反対側から手頃なクエストを探していたミアが手に一枚の紙を片手に小走りで駆け寄ってくる。

彼女が見つけてきたクエストの内容はこうだ。

《依頼人…『ローゼンベルグ公国・ティギリス方面・第八警備大隊・

大隊長補佐』『パトリシア・オーゼン』

依頼内容…先日、ティグリス近隣の森にて狩猟を行っていた猟師三名が『第八種危険指定生物・ポイズンビー』の大軍に襲われた。三名とも辛くも逃れたものの全員全治一ヶ月の重傷。

調査の結果『ポイズンビー』が異常に増殖しており、周囲の生物や魔物に影響を与えるのも時間の問題と判断した。そこで個体数を減らすために警備隊内で討伐部隊を編成したのだが、他の任務に人員を割いている為頭数が足りていない。このクエストを受けられる方には警備隊の補充要員として討伐に参加して頂きたい。

支給品…回復薬×3、毒消し薬×3

報酬…一人当たり銀貨五枚》

ポイズンビーというのが如何様な生物かは知らないが、生態系を乱すまでに増殖しているのを放置するのは拙いということなのだろう。

《イタタタ…………。この都市の為にもなる上に刀の切れ味も試せる、いいのではないか?》

「(そう、ですね。

他に目ぼしいクエストもないようですし)」

それにしても、パトリシア・オーゼン…………オーゼン殿の御息女か?

#012

ティギリス支部にて発行されたギルドに所属したという証——ランカード——を受付嬢のセツテから受領した茜とミア。

早速クエストを申請した二人は集合場所である北門前の広場へと足を運んだ。

中世のヨーロッパを彷彿とさせる町並みにあつて、広場も整備の手が行き届いており、中央に作られた比較的大きな噴水が美しい景観を引き立てている。

そんな広場の片隅にある警備隊の詰め所の前には、既に十数名程度の警備隊員が整然と並び、装備品——軽量化の為に面積を極端まで減らしたプレートアーマーと鑄造式的大量生産品の片手剣——のチェックに余念がないようだ。

近くにはランカー達が屯し、こちらは討伐対象が命に関わるほどの強敵ではない為か緊張感の欠片もなく、援軍という割には不安要素が増えただけのような気さえしてくる。

茜とミアはというと、集団よりやや離れた場所に控え周りから視線を集めていた。

片や女性の割には高身長だが、凛々しい顔立ちと均整のとれた体つきに加え、珍しい黒髪が神秘的な雰囲気を出す美少女。片や常に仏頂面で警戒心剥き出しだが、それらを差し引いても愛らしい顔立ちと白銀の犬耳と尻尾が相まって保護欲を掻き立てる美少女。

両名共に人目を引く要素満載なのだが、前者は我関せずと『陽炎』かげろう他装備の具合を確かめていた。

【Side..茜】

——よし、急ごしらえの手甲だが仕上がりは上々だな。

実は刀を造る合間に防具の試作品を幾つか考案し、その中で一番の良案を何とか完成まで漕ぎ着けていたのだ。

右腕の上腕から手の甲までを、左腕の肘から手の甲までを覆う二対の装身具・手甲『試作壺型』。

革や布の部分はロータス殿の伝を頼って専門店に製作を依頼、出来上がった品の要（太い血管の通っている手の甲など）を極限まで薄く延ばした玉鋼で覆っている。

他にも私と天目一個が共同で考案、開発したギミックも搭載し、未完成で名も決まっていなが割と自慢の一品だ。

刀『陽炎』、脇差『———』、鎖帷子『———』、手甲『試作壺型』。

まだ色々足りないが、これが最終的に私が目指す装備の全て。

今回のクエストの難易度なら、寧ろ心配なのはミアの方な気がする。

何故なら、ミアの服装は狩猟に特化した軽装で、胸当て等の防具も革製だからだ。

「せめてミアの分だけでも鎖帷子が完成していたら」

「もう、心配性だなアカネさんは。

山で獣を狩る時は何時もこの格好だったし、それにポイズンビーとの戦闘は始めてじゃないから大丈夫だよ」

ミアの腕前は何度か手合わせして実力も確かめたのだが、どうやら一緒に暮らす内に情が移ってしまったようで、本当の妹のように接している自分がいた。

例えば、何時か来る別れが辛くなるだけだと分かっている………な。

胸に過ぎった感情に蓋をして、ミアからポイズンビーの詳しい生態や行動・攻撃のパターンなどを聞いていると俄に騒がしかった周りの喧噪が静まり返る。

視線を巡らせると、詰め所の中から他の警備隊員とは明らかに一

線を描いた装備を身に纏った女性がスタッフ装備の警備隊員二名を引き連れて出てきたのが見えた。

その姿を見て警備隊員達は一斉に敬礼。

更には、だらけきっていたランカー達もが佇まいを直しているではないか。

集まった一堂を見回し、全員が拝聴の姿勢をとっていることを確認した彼女が口を開く。

「警備兵の皆は御勤めご苦労、ランカーの諸兄には快くクエストを引き受けて頂いたことに感謝する。

今回の任務は、この私『ローゼンベルグ公国・ティグリス方面・第八警備大隊・大隊長補佐』『パトリシア・オーゼン』が指揮を執ることに相成ったので宜しく頼む」

軟らかくも凜とした態度に見合った良く通る声は聞いていて気持ちがいいくらいだ。

《指揮能力は高そうだな》

「（矢張り、オーゼン殿の親類又は縁者でしょうか？）」

《分らん。だが、ガイアスという男の武は相当のものの筈。そんな男の補佐官というなら相応の知略は持って然るべきだろう。

まあ、お手並み拝見だな》

「ではこれより本作戦の概要を説明します――」

さて、もう直ぐだな。

久々の実戦、勘が鈍っていないといいんだが。

と、張り切っていた時期が私にもありました。

「不満かな？ センドウ」

「いえ、与えられた役割に徹することに異存などありません」

傍らに仁王立ちし、眼前に広がる鬱葱とした森を見据えるパトリシア殿からの問い掛けに慌てることなく答える。

今回第八警備大隊が立案した作戦が――

ポイズンビーの巣があると目される地点で彼らの警戒網ギリギリの所に警備隊員とランカーの混成部隊A班を待機させるファーストフェイズ。

A班はそのまま囨に引っ掛り向かって来る敵主力の数を減らしながら時間稼ぎの防戦、その隙に警備隊員のみで構成されたB班が奇襲をかけ『第七種危険指定生物』までなら効果が見込める催涙煙を

巢穴に流し込むセカンドフェイズ。

巢穴の中の兵隊蜂と女王蜂を沈黙させたB班がA班と交戦中の敵主力を背後から急襲し一気に殲滅するサードフェイズ。

―――のスリーステップ。

そして私とミアが配置されたのは不足の事態が起こった時の為に、街道の外れの森の入り口に陣取った本隊。

ギルドの新参者である私達には妥当な判断だろう。

このまま恙無く任務も終わるかと思われたその時、森がざわめきミアが木々の隙間を駆け抜けて来るのが見えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9560o/>

最優の鍛冶師

2011年9月9日07時41分発行